

〈研究ノート〉

京都西陣と西陣織に関する一考察

——西陣織物業を中心として——

村 西 一 男

目	次
はじめに	Ⅲ 西陣地域と織物業の歴史
I 西陣の概要	Ⅳ 西陣織の現況
II 西陣織とは	まとめとして

はじめに

京都府民の多くは、「西陣」という言葉を聞いて「西陣織」を思い浮かべ、そして室町時代に「応仁の乱」が起きたとき、西軍の本陣が置かれた場所だから「西陣」と呼ばれるようになったと理解をしている。

しかし、全国的にみると、「西陣織」の知名度は高いが、「応仁の乱」と「西陣」との結びつきについて、どの程度理解をしているかは甚だ疑問である。

現在、京都市内に「西陣」と称する行政区画は存在しない。しかし、この地域は、古くから「西陣」と呼ばれ、その呼び名が定着している。また、地元の繊維業者間では、「西陣織」を略して「西陣」と呼ぶことも多い。

通常「西陣」と呼ばれている地域は、京都市内の西北部に位置し、一辺約1kmのほぼ正方形の範囲を指している。この中には、名称の一部に「西陣」を付した場所、建物が数多くある。たとえば、西陣小学校、西陣中央小学校、西陣郵便局、西陣児童館やマンション、商店、企業やその支店などの名称の中にも見受けられる。

本稿では、「西陣」の成り立ちとその後の経緯を紹介し、あわせて、我が国を代表する高級絹織物である「西陣織」およびそれを担っている西陣織物業界の歴史と現況について述べる。

I 西陣の概要

京都（京都市）は、第50代桓武天皇が、延暦13年（794年）に長岡京（現在の向日市、長岡京市、京都市西京区にまたがる広範囲な都域）より京都に都を移し、その後、明治2年（1869年）に、第122代明治天皇が東京へ遷都されるまで、約1080年間にわたり政治、経済、文化の中心都市として栄えた。「千年の都」と呼ばれる所以である。

明治維新による東京遷都後も、後年「京都策」とと呼ばれる一連の京都近代化策を推進し、都

市の近代化に努めた。明治22年（1889年）に市制を發布，施行された。平成31年（2019年）現在の人口は約147万人で，人口規模は，我が国第8位である。

「西陣」地域は，京都市内の西北部（北野天満宮の東，京都御苑の西，大徳寺の南，元離宮二条城の北側）に位置し，その範囲は，京都市上京区の東西は室町通から千本通まで，南北は鞍馬口通から中立売通に囲まれた地域を指すことが多い。ただ，「西陣織」に関わる住民の住居・職場分布みると，もう少し範囲が広く，最盛期には一辺約3 kmの地域に，家族を含めて約20万人が住み，その内多くの住民は，いわゆる「織屋建ち」と呼ばれている町屋で，職住一体の生活を営んでいた。

II 西陣織とは

「西陣織」は，ほとんど手作業による，多品種少量生産方式を基盤とした先染の紋織物である。「西陣織」は，平安時代以降続いてきた文化の担い手としての優れたデザイン，高い技術力と創造力，表現力があいまって創られる我が国を代表する高級絹織物である。

現在，市販されている主な商品は次のとおりである。

袋帯^{ふくろおび}，なごや帯，綴れ帯^{つづれおび}，きもの（女物），きもの（男物），金襴^{きんらん}，カーテン，ネクタイ，ショール・ストール・マフラーなど。

「西陣織」は，昭和49年（1974年），通商産業省（現在の経済産業省）により「指定伝統産品」に指定された。選ばれた「西陣織」は，次の12種類で，製法についても品種ごとに技術・技法が指定されている。

- ①「綴れ^{つづれ}」，②「錦（経錦^{たてにしき}）」，③「錦（緯錦^{ぬきにしき}）」，④「緞子^{どんす}」，⑤「朱珍^{しゅちん}」，⑥「紹巴^{しょうは}」，⑦「風通^{ふうつう}」，⑧「もじり織」，⑨「本しば織」，⑩「ピロード」，⑪「絣織^{かすりおり}」，⑫「紬^{つむぎ}」。

・原材料

使用する糸は，生糸，玉糸，真綿のつむぎ糸もしくはこれらと同等の材質を有する絹糸，綿糸，麻糸または金糸もしくは銀糸とすること。箔は，金箔，銀箔もしくはうるし箔またはこれらと同等の効用を有するものとする。

・特徴

先染めの紋織物で，多くの品種を少量ずつ生産すること。

・商品（織り方）の種類

1, 「綴^{つづれ}」

平織を応用した織り方で，経糸^{たていと}が見えないように密度の大きい緯糸^{よこいと}で絵画のような模様を織り出す。

2, 「経錦^{たてにしき}」

縦糸で地模様を表す織物。

3, 「緯錦^{ぬきにしき}」

通常、三枚綾として、多くの^{えぬき}絵緯を用いてさまざまな紋様を織り出す。錦地の代表ともいわれている。

(以下略)

Ⅲ 西陣地域と織物業の歴史

「西陣織」の源流は、古墳時代にまでさかのぼることができる。5～6世紀頃、大陸からの渡来人である豪族の秦氏により、養蚕と絹織物の技術が我が国に伝えられた。飛鳥時代、奈良時代が過ぎ、京都への遷都が行われると、朝廷は「織部司」と呼ばれる役所を設置した。そして、絹織物技術を取得した職人達を組織化し、主として現在の上京区黒門上長者町付近に住んでいた職人達を中心に、綾や錦などの高級織物を生産することを奨励した。これに伴い、この地域が高級織物の生産地として発展していった。そして、織部町といわれる町づくりができた。

しかし、平安時代も中期以降になると、こうした官主導の織物工場も徐々に下火になっていった。いわゆる^{りつりょうせい}律令制のたががゆるみだしたのである。しかし、職人達は、やはり織部町の近く^{おおとねり}の大舎人町に集まって住み、鎌倉時代から「大舎人の綾」とか「大官の絹」などと呼ばれた絹織物を生産していた。また、つねに大陸から伝えられる新しい技術も取り入れるなどし、優れた絹織物づくりで^{くろりょう}勳んでいった。室町時代に入ると、^{おおとねりざ}大舎人座と称する同業組合のような組織をつくり、朝廷の内蔵寮からの需要に応えながら、一般の公家や武士からの注文にも応じていた。

「応仁の乱（応仁・文明の乱）」により「西陣」は大変貌した。応仁元年（1467年）、足利幕府8代將軍足利義政の弟義視と、ようやく誕生した義政の嫡男義尚（生母は日野富子）との間で家督争いがおこった。そして当時、幕府の実権をにぎろうとして争っていた細川勝元と山名宗全が、その争いに介入したため、さらに対立が激化し、双方武力に訴えたため、後世「応仁の乱」といわれる戦乱が始まった。

各地の守護大名は、それぞれ細川方（東軍）と山名方（西軍）に分かれて戦い、「西陣」を含めて京都市内一帯は、戦火によって焼け野原となり荒廃した。戦乱のさなか、1473年（文明5年）に細川勝元、山名宗全とも死去したが、後継者の細川政元と山名政豊が引継ぎ戦いを続けた。開始10年後の文明9年（1477年）、戦いに疲れた両軍の間で和議が結ばれほぼ終了した。「応仁記」の「^{なれ}汝ヤシル都ハ野辺ノ夕雲雀アガルヲ見テモ落ツルナミダハ（伝15世紀の飯尾六左右衛門尉作）」はよく知られている。戦国時代の幕開けである。

この乱で「西陣」は一時壊滅状態になり、職人の多くは堺や山口に逃れた。そこで中国から入ってきた新しい技術を身につけ、戦乱後、新在家や白雲村（現在の^{はぶたえ}上京区新町通今出川上ル付近）にもどり、桑を植えて蚕を飼い、^{ねりぬきかた}練貫方という団体をつくり、主に羽二重や練貫を生産した。

天正18年（1590年）、全国をほぼ統一した豊臣秀吉も、「西陣織」の発展を図り、後押しをした。秀吉は、白雲村付近の水質が桑の栽培、蚕の飼育、絹織物の生産に適さないとして現在の場所に移るように命じた。それとともに、これを保護し生産を奨励し、あわせて販路の拡大にも便宜を

写真1 西陣跡 石碑
平成31年 3月22日撮影



上京区今出川通大宮東入元伊佐町
京都市考古資料館前

写真2 山名宗全邸跡 石碑
平成31年 3月22日撮影



上京区堀川通上立売下ル左入山名町

図った。その結果、絹織物の生産が飛躍的に増加した。従来、武士階級のみ着用していた紋織^{もんおり}を、富裕層などの庶民も使用するようになった。このようにして需要が拡大していった。

あわせて、同時に、職人達は明の新方式を取得し、自家でも技術力の向上と品質の改良に努めた結果、しだいに他を圧倒するようになった。16世紀末、俵屋某が唐織^{からおり}の技法を発展させ、金襴^{きんらん}・羅^ら・紗^{しゃ}・綾^{あや}にも新工夫が加えられ、さらに繻子^{しゅうす}・緞子^{どんす}・モールの製法も改善された。この異国様式の「西陣織」は、時代の豪壮な好みになって発展した。

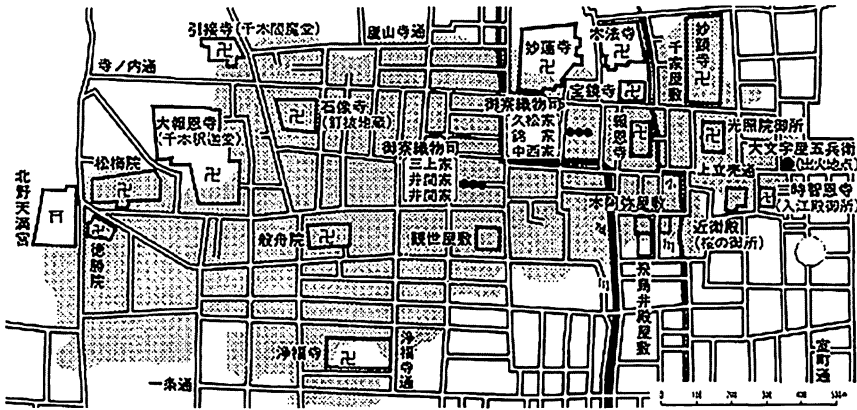
明暦3年(1657年)正月の「振袖火事」といわれた江戸の大火は、「西陣織」の普及にも大きな影響を与えた。徳川幕府開府後約50年経過し、人々の生活水準は著しく向上し奢侈^{しやし}の風が広まっており、大火後の大幅な衣服需要による注文が「西陣」にも殺到した。「西陣」でも、技術改良、合理的な分業体制を確立するなどで対応するとともに、「西陣織」の高級イメージ化を推進した。元禄時代(1700年頃)、織屋は500軒、織機は1,000台を越えていた。

しかし、この発展に大きな影を落したのは、享保15年(1730年)の大火いわゆる「西陣焼け」である。同年6月20日午後2時頃、上立売通室町西入「大文字屋五兵衛」宅の台所より出火し、午後5時頃迄に「西陣」一帯のほとんどもを焼きつくした。消失町数108町、民家3,000軒余、織機3,012機を失い壊滅状態となった。この結果、ここで働く職人も職を失い離散し、相生、長浜、丹後などの地方機業地へ移っていった。丁度、地方機業勃興の時期でもあったので、その後の西陣機業に予想以上の打撃を与えることになった。

その後、官民一体となった復旧事業により一旦回復するが、天保時代に入ると、天保4年(1833年)、6年(1835年)、8年(1837年)の相次ぐ凶作で、米価は4倍に高騰し、織物は価格を下げてでも思うように売れなかった。片や桐生地方では、すでに大量生産による低価格品が生産され、「西陣」の独占的な地位は、幕府の保護にもかかわらず低下していった。

さらに、天保12年(1841年)の「天保の改革」による「奢侈禁止令^{しやしきんしれい}」や「株仲間解散令」で一層の不況となり、絹織物の生産を止めて綿織物で命脈をつなぐありさまとなった。そして、幕末の動乱などで、この衰退状況が改善されぬまま、明治維新を迎えることになった。

第1図 享保15年（1730年）に発生した西陣焼け（西陣大火）による消失地域



出所：京都市上京区役所 ホームページより ページ番号12476

明治維新後の明治5年（1872年）、工務省が設立した物産会社より、絹織物産業の盛んな先進国フランスより新技術を導入するため、フランスリヨンへ職人井上伊兵衛と佐倉常七、吉田忠七が派遣された。3人はよく未知の海外での技術学習に耐え、井上、佐倉は最新の織機などを購入し帰国した。その機器はジャガード織機、ボタン、ベゲヨー（金おさ）など10種であった。残留した吉田は、明治7年（1874年）帰国途上、乗船していた客船が伊豆沖で沈没し、船と運命をともにした。3年後の明治10年（1877年）、機大工荒木小兵が輸入ジャガード織機を研究し、国産化に成功した。その結果、^{そらびきばた}空引機（^{たかばた}高機）ではできなかった幾多の織物を産み出し、量産を可能にした。

明治40年（1907年）時点における「西陣織」の生産体制は、『京都府誌下巻』によると、織機数22,062機、戸数7,197戸、従事者数は17,187人であった。当時、そのほとんどが、職住一体の
 家内企業であった。

「西陣」は永い歴史において、幾多の戦乱をはじめとし、大火、飢饉、他機業の進出、「奢侈禁止令」などにより壊滅的打撃を被ったことがたびたびあった。しかし、その都度、従事者達は、忍耐と情熱、あるときは、時の権力者の保護により、そして、他機業地の先をいく技術の開発、導入でもって、伝統をささえ、その困難を乗り越えてきた。

昭和13年（1938年）、「国家総動員法」の公布・施行により、業務の転換を余儀なくされ、「西陣織」の生産を取り止め、爆弾の被布やパラシュートなど軍需品の生産を始めた。翌14年（1939年）には、「国民徴用令」により働き手をとられ、翌15年（1940年）には「奢侈禁止令」が公布され、さらに「金属類回収令」にもとづき織機も供出されてしまった。そして、翌昭和16年（1941年）には太平洋戦争へ突入した。この結果、戦中の「西陣織」生産は皆無となり、終戦までの長きにわたり生産が止まってしまった。

一般的に、京都は、米国人で知日家のラングドン・ウォナー博士が、京都、奈良の文化財が戦火により消失することを惜しんで、米国政府に空爆の取り止めを進言したといわれており、戦後、日本政府より叙勲を受けている。だが、この時期の空爆中止は、国務省が戦略上決めたとの説も

あり、真偽のほどは定かではない。通常、京都市内は「西陣」地区を含めて、太平洋戦争中の空爆による被害を受けなかったと多くの人が思っている。しかし、昭和20年（1945年）1月には東山空襲が、6月には西陣空襲と呼ばれている米軍機B29による爆撃を受けた。東山区馬町、「西陣」、三菱太秦工場では、死傷者が出て、建物も被害を受けている。特に「西陣」地区では、死者56人、重傷者66人の犠牲者を出し、京都市内最大の被害を受けたとの記録もある。当時、太平洋戦争末期で、厳重な情報統制下、被害は軽微であるとの発表に止められた。

昭和20年（1945年）8月、太平洋戦争が終わり、米軍の占領による軍政下に置かれた。占領軍は、絹・人絹の凍結令を出し、生産は、輸出向けおよび占領軍司令部の要望するものに限り許された。その後、昭和21年（1946年）に、この凍結令は廃止され登録商制度に移ったものの、政府が統制権を持ち、その枠内での自由競争を許す制度であった。

昭和24年（1949年）、正絹織物の統制が撤廃されたが、同年秋の生糸の暴騰による原料高となり、適正な価格で売れない製品安が続き、このため経営を圧迫し倒産が相次いだ。だが、昭和25年（1950年）に始まった「朝鮮戦争」による国連軍の麻袋、軍服、毛布、テントなどに使用する繊維製品の需要が増大し、価格も持ち直した。当時、この需要拡大を「ガチャマン景気」と呼び、これを契機として全国的に景気が上昇した。「西陣」もこの余波を受け生産量が増加した。この「ガチャマン景気」とは、「紡機をガチャンと動かせば、万の金が入る」という意味で、当時よく使われた。

太平洋戦争終了後、「西陣」でも効率化を図るため、織機を中心に機械化が進み、新しい技術も次々導入され、工程も細分化されていった。

通商産業省は、昭和49年（1974年）に伝統産業を保護するため、218品目を「伝統工芸品」に指定した。京都には、織物・染物・焼物・漆器・木工品・人形など「伝統工芸品」といわれているものが数多くあり、「西陣織」も12種類が「伝統工芸品」の指定を受けた。

関西では、昔から「京の着倒れ」、「大阪の食い倒れ」、「江戸の飲み倒れまたは買い倒れ」といわれている。これは、文字どおり京都人は着物道楽の風潮があり、食べ物に金をかけるより、衣服に大金をはたいても惜しくないと、考える人が他地方より多かった。そのため、「西陣」も、和装関係品の需要が多いため、職人達の技能力が高く、洗練された品質のよい高級品が数多く生産され、これらに従事する関係者も多かった。

さかのぼれば明治維新後、政府は礼服、官服の洋服化を指示し、昭和に入り、戦前は華美な服装を止めようという風潮、それに加えて、畳上の生活が減るなど生活も洋風化していった。さらに、高価である、着付けが難しいうえ時間がかかる、身軽に動けない、洗い張りや仕立てが簡単にできないなどの理由が重なり、着物は主とした冠婚葬祭時に着用するものと考えた人が増加し、需要が減少した。西陣織工業組合の資料によると、「西陣織物」の総出荷額は、最盛期である昭和60年（1985年）の年間約2,570億円から、平成27年（2015年）には約319億円となり、昭和60年（1985年）と比較すると12.4%と激減している。だが、反面、近年着物の良さが見直され、ふたたび、その歩みは遅いが、復活のきざしが見えてきたとの報道もある。

写真 3, 写真 4 西陣の街並み

写真 3
上京区猪熊通上立売下ル
国登録有形文化財 佐々木治子氏邸
平成31年（2019年）3月19日撮影



写真 4
上京区浄福寺通上立売上ル
大黒町の石畳通り
Wikipedia 西陣写真より



「西陣織」は、社会的分業制度が高度に発達している。製織段階にいたるまで、数多くの工程があり、これらの工程はすべて分業でおこなわれている。図案家、意匠紋紙業、撚糸業、糸染業、整糸業、^{そう}綜こう業、整理加工業などの工程を、それぞれ独立した企業が生産にたずさわっている。

さらに「西陣織」にたずさわっている企業を次のように分けることもできる。

- ①自己工場のみで生産をしている企業
- ②^{でばた}出機のみで生産をしている企業
- ③自己工場と^{でばた}出機を併用している企業

^{でばた}出機とは、織物業者が下請工場に製織を委託する業界制度で、京都市内に限らず府下丹後地域でも数多く利用されている。

第 1 表は、近年の「西陣織」出荷高、出荷額を示したものである。

第 1 表 「西陣織」の出荷高および出荷額推移表
標本調査で、稼働織機台数をもとに、西陣全体の出荷高、出荷額を推計したものである。

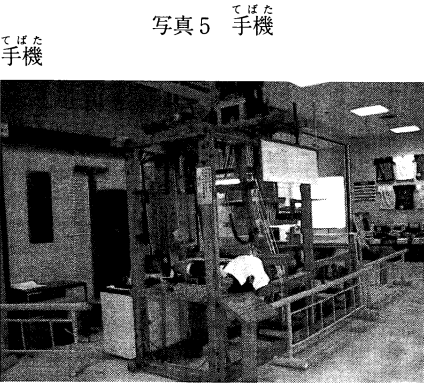
	合計		帯		着尺		その他	
	出荷高	出荷額	出荷高	出荷額	出荷高	出荷額	出荷高	出荷額
平成25年	220,646	1,829,508	122,357	1,355,352	18,386	122,326	79,802	361,831
平成26年	205,616	1,792,648	103,486	1,326,825	17,261	107,382	84,863	358,435
平成27年	184,227	1,613,464	90,170	1,167,719	15,720	101,408	78,337	344,338
平成28年	171,311	1,523,271	83,201	1,104,509	13,817	91,159	74,293	327,603
平成29年	173,137	1,501,925	82,178	1,093,995	13,953	95,521	77,007	312,409
平成30年11月	156,985	1,404,957	66,824	977,155	14,454	105,052	75,707	321,750

出所：平成30年11月における京都織布生産高動態統計調査より

単位 出荷高 m² 出荷額千円

原材料

使用する糸は、生糸、玉糸、真綿のつむぎ糸もしくはこれらと同等の材質を有する絹糸、綿糸、麻糸または金糸、銀糸とすること。



上京区堀川通今出川下ル西陣織会館 2 階の展示品
平成31年（2019年）3月22日撮影

「西陣織」の製法

「西陣織」は、先染めの紋織物で、その多くの工程を手作業にたよる多種少量生産品である。

Ⅳ 西陣地域と織物業の現況

戦後、我が国の景気は、周期的にアップダウンを繰り返してきた。主なものは「神武景気」、
「なべ底不況」に始まり「バブル景気」、「ITバブル」、「IT不況」などがある。いずれの業界
でも、好況時は大きく成長する企業がかった反面、不況期に入ると、閉鎖、倒産する企業が多く
でた。好不況の波は「西陣」でも例外ではなく、不況時になると、顧客の買い控えなどで市場環
境が悪化し注文量が減少した。「西陣」では、職住一体の家内企業が多かったせいもあり、不況
にも耐え技術と伝統を守りながら、今日を迎えている企業が多い。

第2表は、平成30年（2018年）11月時点における、「西陣織」の出荷高と出荷額を示したもの
である。

第2表 「西陣織」の出荷高および出荷額（平成30年11月現在）

区分		合計	前月比 (%)	前年比 (%)	絹織物(純) 絹紡織物	絹織物 交織	人絹織物	合成繊維	毛織物	その他 織物
総計	数量(m ²)	156,985	Δ6.1	Δ11.1	70,981	36,356	1,579	46,093	609	2,367
	金額(千円)	1,404,957	Δ7.1	Δ9.3	1,140,199	129,359	35,330	87,255	999	11,815
帯の部	数量(本)	32,662	Δ16.5	Δ21.2	15,215	17,447	—	—	—	—
	金額(千円)	977,155	Δ14.3	Δ13.6	887,637	89,518	—	—	—	—
着尺の部	数量(反)	3,135	10.8	Δ9.5	2,759	375	—	—	—	—
	金額(千円)	106,952	12.6	Δ0.3	96,259	9,763	—	—	—	—
その他 の部	数量(m ²)	75,707	5.5	Δ1.4	19,412	6,647	1,579	45,093	609	2,367
	金額(千円)	321,750	15.6	2.9	156,273.0	30,079	35,330	87,255	999	11,815

織布生産高動態統計調査（統計京都2018年11月号）より。製品区分による標本調査で、稼働織機京都府台数をもとに、
西陣全体の出荷高および出荷額を推計している。

近年、前述のように着物離れが増加しているが、この原因は次によると思われる。

明治維新後、政府は太政官布告でもって「爾今礼服や官服を洋装にすべし」と布告した。また、昭和に入り、華美な服装を止めようとの風潮もあった。さらに太平洋戦争中は、身を守るため、動きやすい服装が必要となり、必然的に洋装化し、着物を着用する機会が減っていった。その他、価格が高い、着付けが難しく時間がかかる、動き難い、洗濯（洗い張りとは違って）が簡単にできない、夏は暑い、生活が洋風化し椅子生活が増加したなどの理由が重なり、着物が敬遠され、需要が減少した。着物は、冠婚葬祭時に使用する特別な衣服として扱われることが増えてきた。そして、後継者の不足にも悩んでいる。現在も、残念ながらこの趨勢に歯止めをかけることは、厳しいのではないと思われる。

まとめとして

和服は、我が国伝来の衣服として、長期にわたり改良・改善されながら、愛用されてきた。そして、今後の需要見通しは厳しいものの、消滅することはない。ただ、前述のとおり、需要増を図ることは、前途多難と思われる。

和装業界では、この着物離れによる需要の減少を防ぐため、業界あげて、いろいろな方策を検討し、実施可能なものについては、すでに実行をしている。例えば、古くは太平洋戦争中から普及した女性のもんぺ、作務衣など洋装と和装の一体化、小物品草履、財布、名刺入れなどへの利用、さらに従来の和風柄から洋風柄への転換、簡単に洗濯・着脱ができる着物の開発、洋装業界など他業界との協業、提携などである。

現在も「西陣織」は、我が国絹織物技術の最高峰の地位を占めている。今後も、文字どおり「伝統と革新」を目標に、より積極的に国内のみならず海外の新市場も開拓して販路を拡げ、他業界との協業も図り新商品を開発し、コストダウンの推進にも取り組むべきである。そして、後継者の育成にも励みつつ、適正な価格の新しい「西陣織」商品を創作し、顧客に喜ばれる業界に発展すること願っている。

参考文献

- 赤松俊秀他 [1977]『京都府の歴史』山川出版社。
- 石田晴男 [2013]『応仁・文明の乱』吉川弘文堂。
- 今泉篤男他 [1980]『京都の歴史 8 古都の近代』京都市史編さん所。
- 岩上力他 [2009]『旅の雑学ノート』ダイヤモンド社。
- 応仁の乱研究会 [2017]『応仁の乱人物ファイル120』講談社ビーシー。
- 神山洋一 [1993]『写真集 西陣 美を織る暮らし』大月書店。
- 桐畑健他 [1986]『岩波グラフィックス34 西陣織 伝承の技』岩波書店。
- 京都市産業観光局 [2014]『わたしたちの伝統産業—1200年の京が育んだ手づくりの文化とところ』京都市産業観光局商工部。
- 西陣織工業組合『西陣年鑑』西陣織工業組合 [発行年度不明]。

永原慶二 [1990] 『日本の歴史10 下克上の時代』 中央公論社。

室月圭吾監修 [1980] 『要説日本史年表』 山川出版社。

Web サイト

京都市上京区役所『西陣発展と西陣焼け』京都市上京区役所。

西陣織工業組合『西陣の由来 宮廷の織物作りから』西陣織工業組合。

注1, 「Ⅲ, 西陣地域と織物業の歴史」は, 桐畑健他 [1986] 『岩波グラフィックス34 西陣織 伝承の技』岩波書店, 今泉篤男他編さん [1980] 『京都の歴史第8巻 古都の近代』京都市史編さん所などを参考に作成した。

注2, 写真4の佐々木治子氏邸は, 登録番号26-0051国登録有形文化財に指定されている江戸後期の建物で, 当時は両替商であった。家屋撮影時, 同家佐々木正剛氏より, 同家とその近辺の説明を受けた。

(受付 2019年3月31日)